ボランティア・ワークキャンプを契機とした ユースワークにおける学生の意識変容

磯田　浩司／仲山　友

要旨

本稿では，NPO法人グッド（以下グッドと表記）の活動に参加した1名の大学生を対象とし，内面の変化に焦点を当て，その成長プロセスを明らかにする。特に「ものの見方・考え方」の変化に着目し，かつ，1回のワークキャンプ経験のみならず，その後のさまざまな活動の経験も視野に入れ，本人に起こった意識変容・行動変容を，定性的に明らかにする。なお，本文中「筆者」とは磯田を指し，仲山は資料収集，分析，執筆補助を行った。

1．はじめに 先の実践報告に対する本稿の位置付け

筆者らは，ライフヒストリーの手法を用いて，NPO法人グッドのプログラム参加者の変容・成長について分析を行ってきた（磯田・仲山 2022,2023）。本稿では，新たな対象者として男子参加者1名(Y)を取り上げ，グッドにおけるユースワークについて段階を追って報告する。先の実践報告（磯田・仲山2023）に挙げた通り，グッドのワークキャンプに参加する若者には大別して3つの層がある。すなわち,「1.不登校・引きこもりといった，大きな問題を抱えている若者」「2.なんとか学生生活は送れているものの，対人関係に対する強い苦手意識などの問題を抱えている若者」そして「3.問題なく，元気に学生生活を送っているように見える若者」である。今回取り上げるのは3.の若者の中でも特に,「体育会系気質で明るく，コミュニケーション能力の高い，全く問題がなさそうに見える若者」である。彼らには，大人＝ユースワーカーの関与は一見不必要に感じられる。実際，彼らも実生活に支障がないため，必要性を感じておらず，ともすると他者の関与を煩わしく感じる可能性が高い。つまり，ユースワーク的関与が難しい層なのだ。しかし，彼らも完璧なわけではない。普段属しているコミュニティを離れて人と関わったり，適切な指導・助言を受けたりすることによって，大きく変化していく可能性を秘めている。今回はそのような若者を取り上げ，その意識変容について分析し，ユースワークのポイントを整理することで，青少年教育の対象として見過ごされがちな学生たちへのアプローチについて紹介したい。

なお，Yは2016年より今日に至るまで，約8年間グッドの活動に携わっており，継続的にその変化を追うことができている。本稿では大学2年次の初回キャンプから大学卒業まで（約2年8ヶ月）を対象とし，社会人になってからの変容については次稿で報告したい。

2. グッドにおけるユースワークとは

グッドは,「不登校・引きこもり経験者を含むすべての若者」を対象として，ボランティア・ワークキャンプ（以下，ワークキャンプまたはキャンプと表記）を主幹事業とするNPO法人である。ワークキャンプとは地域課題解決を目的とした合宿型ボランティアのことであり，グッドでは国内・海外で，3日間～2週間のプログラムを実施している。特徴として，参加者の「きっかけ作り」にも重きを置いており，問題が顕在化している若者にアプローチするだけではなく，予防的側面も大きいことは先の実践報告でも解説した[1]。

3. 実践報告

3-1. 概要

本実践報告では、大学2年次から現在に至るまでグッドのプログラムに参加しているYを対象とする。学生時代だけではなく，卒業後もグッドの活動に関わり続け，性格・行動面での大きな変化が見られた人物である。これまで取り上げた学生とはタイプの異なる学生であったことが対象者の選定理由である（磯田・仲山2022, 2023)。

3-2. Yのプロフィール

1996年千葉県出身の男性である。2015年，関東圏の国立大学教育学部に入学した。スポーツ万能なだけでなく，勉強でも苦労したことがなかった。高校3年まで強豪校の野球部で完全燃焼した上，学習塾に通うこともなく，自宅から通学できる国立大学に現役合格した。在学中，2年次（2016年8月）に参加したスリランカキャンプを契機に，計8回グッドの主催するワークキャンプに参加した。また，2016年11月より学生インターンとなり，グッドのサポートや，イベント企画などに携わった。大学卒業から約2年後にグッドのシェアハウス[2]に住み始め，一般企業に勤務する現在も，帰宅後や休日に，ボランティアとしてグッドの活動に積極的に携わっている。

3-3. 実践報告の手法

対象者の発言や記述をもとに，意識変容が起こったタイミングを特定し，ユースワークにおけるポイント（意図・内容）について筆者が考察を加える形で報告する。対象者の証言については，インタビュー動画[3]と，本人が記述した作文[4]から収集した。なお，筆者の解説・解釈についてはY本人にも誤認や違和感が無いか入念な確認を行った。

1　詳細については（磯田・仲山2022, 2023）を参照されたい。

2　グッドの事務所には，不登校・引きこもり経験者が暮らす自立支援寮と，グッドの活動をサポートする大学生・社会人が暮らすシェアハウスが併設されている。

3　インタビューはグッドの事務所において，2021年3月25日に実施した（東京都板橋区)。内容は調査対象者の許可を取った上で映像及び音声として記録している。インタビューの際には，共通の経験を持つ親しい関係性の中で行われる証言を重視し，対象者と同年代である参加者Hを聞き手とし，経験談の詳細な聞き取りを行った。カッコ内は筆者による補足説明である。

4　ワークキャンプ参加前後に提出する「事前作文」「事後作文」および，大学卒業後，本研究のために経験を振り返った本人の作文を資料とした。カッコ内は筆者による補足説明である。

3-4. 契機となったスリランカワークキャンプへの参加

3-4-1. Yの大学生活とワークキャンプへの参加動機—新たなる世界を求めて

Yは2016年，大学2年次の夏期休暇に，大学の講座の一環で，スリランカワークキャンプに参加した。その動機について，インタビューで以下のように語っている。

Y：元々は野球をやっていて，将来も野球で飯食えたらいいな，くらいやってたけど，高校の最後に腰を壊して，大学では野球ができなくなったから，とりあえずめちゃくちゃ遊んだ。1年生の秋くらいには飲み会にも女の子と遊ぶのにも飽きて，2年生ではチャレンジングなことしようと思った。あんまり大学も行ってなかったから，単位も取れて，飲み会の話のネタで使えそうなやつをやろうと思って，たまたま受けたガイダンスにコージ兄（筆者のこと。以下同様）が来て，（中略）スリランカもどこにあるか知らないけど，その場で参加を決めて，コージ兄に，「僕，行くんでお願いします！」って言った。それが，2年生の夏。

当時，Yが在学していた大学では，グッドのキャンプ参加が単位認定される制度があった。ボランティアの単位認定については賛否両論あるが，このような仕組みによって，ボランティアというワードだけでは参加しなかった層が，グッドのプログラムに参加する機会を創出している。ボランティアとは縁遠かったYであったが，日常生活に変化を求め，「飲み会で語る武勇伝を作りたい」という動機からキャンプに参加することを決めた。

3-4-2. 初回ワークキャンプでの経験1-新しい人間関係の獲得

Yはスリランカの貧しい農村で，道路作りのボランティアに取り組んだ。当時の様子をインタビューで次のように述べている。

Y：スリランカで過ごす中で，日本人で一緒に参加したキャンパーたちもすごく良くて，みんな最初緊張していたのに，日に日に元気になって。（中略）全く関わったことのない人と一緒に道路作るっていうのも楽しくて，心を動かされた。（中略）スリランカの村には，自分が理想としていたあったかい家族があって，そこにも心を動かされた。

Yは大学やバイト先でもすぐに仲間ができ，どこでも楽しく過ごすことができるタイプであった。キャンプ中も，人当たりが良く，誰とでも楽しく遊ぶことができた。一見派手で強めの印象を与えるが，人の欠点を笑いにするようなことは一切せず，道路作りのワーク中も率先して働き，声を出してその場を盛り上げた。キャンプでは，所属するコミュニティや性格が全く違う大学生・社会人と出会うことになる。同じ目標に向かって力を合わせて働き，毎日一緒にご飯を食べ，夜まで語り合って，大自然の中でシンプルな生活が続く。加えて，グッドのキャンプでは，参加者全員が「自分がどんな人生を送ってここに辿り着いたのか」をテーマに自己紹介を行う。Yは，全く関わったことのないタイプの参加者たちの内面にキャンプ開始直後から触れ，安心した状態で関われるようになっていた。そこでYが得たのは，利害関係もなく，肩書きや能力で上下や優劣がつくものでもない，とてもフラットな人間関係であった。Yは日々変化する周囲の参加者の様子に関心を持ち，心動かされていた。また，キャンプはホームステイの家族の愛情に触れた期間でもあった。言葉で意思疎通ができない中でも，身の回りの世話をし，愛情表現をしてくれるスリランカ人家族との関わりは，Yの家族像を大きく変化させた。

3-4-3. 初回ワークキャンプでの経験2－感情の発露

キャンプ終盤には，Yの感情が大きく揺さぶられるエピソードがある。当時の様子をイ

ンタビューで次のように語っている。

Y：そもそも俺の今までの人生で人前で泣いたのは３回しかない，っていうのが，美学だったのね。泣くイコール弱みを見せるだし，悩むイコールウジウジしてる，だから情けない。だから，絶対人前では泣かないし，悩み事があったら一晩寝て忘れるか，改善点を考えて進む。（中略）非日常だからさ，体力的にも心的にも揺れが大きくて，無理をし続けた結果，ワーク最終日に（疲労で）倒れて，みんながワークしているのを他所目に，「あー，俺のスリランカ終わったな。あー，みんな楽しくやってくれたらそれでいいわ」って思って家で寝ていたら，コージ兄がやってきて「みんな待ってるぞ，最後くらい顔出せよ」って言われて，コージ兄に肩を抱かれ，ワーク残り１時間くらいの時にみんなのところに合流して，その瞬間にみんな村人も参加者のみんなも「Y，Y，Y」みたいなの（コールを）やってくれて。で，人生４度目の人前で涙を流すっていう。

H：うれし涙だったの？

Y：うーん，絶対泣かないのが自分だと思っていたからさ，「あーやっちゃったな」みたいな。

H：「人前で泣いちゃったな」みたいな？

Y：今まで自分が良しと思っていたし，これがかっこいいと思っていたあり方が崩れてしまったのは，ちょっとやっちゃったなっていう悔しさと，でも，久しぶりに感情を人前で思い切り出せたっていう意味では，ほんのちょっと心地よかった。

H：（それまでは，感情を）出せてないっていう感覚はあったの？

Y：出せてないって言う感覚はないね。非日常だったっていうのは多分一個デカくて，スリランカの村っていうのも，海外自体（も）初だったし，海外の中でもかなり特殊な場所。（中略）一緒に参加した人たちも日本じゃ絶対関わらないみたいなところで，今まで仲良い人たちじゃ出せないところを出せていたのかなという感覚があったし。自分が全く素の自分になれる環境だったから，その状態で真っ直ぐな愛情を受けたりとか，そこで動いていたみんなの在り方とかみんなの感情とかに触れて，自分の感情も動き出したんだなっていう。

ワークキャンプという非日常の空間において，普段は表出しない感情が発露したタイミングであった。これまでの人間関係を離れ，全く知らない人たちと過ごすワークキャンプでは，普段の自分の性格や感情表現が大きく変わることがある。普段なら話さないような本音を話し，新しい自分を試すことができるのだ。前述の通り，純粋な人間関係の中で自分のありのままの姿を出せるようになっていたYは，周囲の温かい声援に感極まって人前で涙を流す経験をし，感情が大きく動くことを実感した。Yは，無頓着だった自分の感情に目が向き始め，それを好意的に受け止めている様子であった。

3-4-4. 初回ワークキャンプでの経験3-問いから始まる自分自身への向き合い

ここからは，スタッフの視点からYの初回キャンプを分析したい。グッドのキャンプにおいてスタッフは，参加者がどのような人生を歩んできたのか，どんな思いで参加しているのかなど，より深い人物像にも注視するよう心掛けている。本人の課題や生きづらさのようなものを特定し，提示することで，どのようなポイントをクリアすればより肩の力を抜いた状態で気持ちよく人と関わることができるか，という観点からアプローチを行う。

筆者から見たYの第一印象は，「なんでもそつなくこなす，快活な青年」であった。理解も早く，ワークを率先して盛り上げるムードメーカー的存在であった。そんなYにこれまでの人生について，家族や友人関係など質問をすると，Yは，「自分は問題のない人生を送ってきた。悩んだこともなく，家族も問題のない環境で育ってきた」という趣旨の返答をした。しかし，Yの返答には違和感があった。多くの若者と関わった経験とYの様子を照らし合わせてみると，不自由なくのびのびと育ってきた人に特有の人懐っこさや，本心が素直に出てくる感じがない。常に一定の距離感を取り，少し斜めに構えており，それまでの人生が透けて見えてくる感じがしなかったのである。筆者はそんなYに対して，「質問に対する答えは嘘をついている感じではないけれど，プラスチックみたいで温度感がないのはなんでだろうね」と伝えた。

グッドには，キャラクターの異なる複数のスタッフが揃っており，連携してアプローチを行うことで効果を高めている。筆者とともに引率をした若手女性スタッフTは，筆者からの共有の後，Yに何度も話しかけに行った。Yは本人記述の作文で次のように述べている。

Tから何度もちょっかいをかけられた。「あっさりしていて，人に対して膜を張る人，あっさり膜男くんだね」「本当に人に興味あるの？」自分についてそこまで考えてこなかったし，人からもフィードバックをもらったことがなかった。おそらく生まれて初めての，自分の内面に切り込む問いであったので，強く印象に残っている。

Yの人生において，自身についてや，Yと他者との関係性について，このような形で指摘されたのは初めての経験であった。Tの言葉は一見強い表現のようだが，キャンプ期間中に構築された信頼関係がベースにあり，自身について強く興味をもって問われたため，Yは自分自身のことを改めて考える契機を得た。しかし，その時点ではTの問いかけにも，一定の距離感が埋まることはなかった。

3-4-5. 初回ワークキャンプ直後の変化—自己の再発見

帰国してからYの内心では，改めて自分自身と向き合う意識が高まっていた。当時を振り返ってインタビューで次のように述べている。

Y：「うわ～泣いちゃった，人前で」っていうダサさと，でもこれでいいと受け入れてくれたみんなは優しいなっていうのがあったから，「なんでこの人たちはこんなに優しいんだろう」とか思っていた。（中略）人に興味を持ったのもそこが初めてかもしれない。今まで積み上げてきた自分が崩れ去ったから，じゃあ自分ってなんなんだろうとか。今まで感情とかあんまり気にしてこなかったけど，自分ってどういう時にどういうことを感じるんだろうっていう疑問が生まれたのもキャンプの最後の方かな。

キャンプから数週間後，Yから筆者に「話がしたい」という旨の連絡が来て，事務所で話す機会を設けることになる。筆者が記憶するYが語った内容の大筋は以下の通りである。

「謝りたいことがあって来ました。スリランカで，自分の人生は順風満帆で悩みもなかった，と言いましたが，家庭は問題だらけでした。小学校に上がる前に両親は離婚していたし，数年後に同居することになった母の恋人が原因で家族は家にいられなくなり，その男性を残して母・兄・弟と共に家を出ました。頼れる場所がなく，近所のスーパーの駐車場に車を停めてそこから通学する生活が３ヶ月も続きました。その後，県外に家を借り，転校もして半年間過ごし，その後その男性がいなくなった元の家に戻りました。そんなドラマみたいなことがあったのに，誰にも知られたくなくて，悟られないように，そんなこと

は自分の人生に起こっていないように振る舞い続けていたのです。いつの間にか自分の中でも無かったことになっていました。スリランカで話をしたときにも，嘘をついている自覚なく架空の幸せな人生の話をしていたことに帰国後気づいて，本当に驚きました。」

Yはそれまで，自分がどのような生育環境で育ったか，何が大変だったかなど，友人に悟られないようにして生きていた。「問題がなかった」という話が習慣化し，無意識のうちに自身の話で事実が上書きされ，過去の体験を思い出さなくなっていた。Yはスリランカで「悩みなどない」と話していたが，20歳前後の若者であれば，表面的にどれだけ強く見える者であっても，弱い部分や迷いがある。ただ，表面上取り繕うことができたり，器用に周囲に合わせられたりしてしまうと，その弱さは顕在化せず，本人もそれに自覚的になり得ない。「自分とはこういう人間である」という自己規定の枠の中で，心の奥底にある感情や本心に蓋をし，無かったことにして生きているという者も多い。スリランカでの経験の後，Yは筆者を「これまで会ったことのないタイプの大人。母親以外で，初めて頼れると思った大人」と語っている。Yは信頼できると思えた相手から，自身に興味関心を持たれることで，心の底にある自分の感情や過去の出来事を再発見し，自分についてもっと知りたいと思い始めていた。筆者は，キャンプを契機に大きく変容しだしたYの心の動きが途絶えてしまわぬよう，Yにインターンとしてグッドの活動に参加するよう勧めた。当時を振り返った作文では次のような記述がある。

コージ兄の「もっと仲良くしようよ」という言葉がグッドと関わり続けるきっかけになった。「もっと成長できる」「いろんな人がいるから面白い」とかではなく，対個人の関わりを大事にしてくれている感じが嬉しかった。（中略）出会ってから今日まで，グッドの代表とかキャンプの引率者ではなく，コージ兄として自分と関わってくれている感じがしている。

Yにとっての大人像は教員や部活の監督のような距離のある存在だったが，Yにとって筆者が，同じ目線で関わってくれる存在だという認識を得たことが，ユースワークにおける肝要な点である。参加者と主催者という感覚ではなく，フラットな関係であることを示すことで，それまで一歩引いていたYも安心感を持って関わってくるようになった。

3-5. グッドインターンとして過ごした学生時代

3-5-1. イベント担当経験―他者との関係における課題の露見と本人への提示

大学2年次の2016年12月，Yはグッドのクリスマスイベントに企画者として関わることが決まる[5]。イベントは盛り上がりを見せたが，Yは中盤に高熱を出し，中座することになってしまった。その時のことをインタビューで次のように語っている。

Y：自分の中では合格点だった。任されたところは求められている以上のクオリティでできたし，みんな喜んでたし。（中略）その次の日から当時付き合っていた彼女と旅行に行く予定があったのね。（中略）イベントは良かったけど，熱のせいで旅行行けないのが悔しくて。イベント終わりに心配して様子を見に来てくれたメンバーの言葉

5　グッドのインターン制度では，このようにして学生に役割を与え，事務所に来て活動する機会や理由を作るようにしている。取り組む物事があることで，フリースペースに来る口実ができ，人と関わる頻度が増えるだけではなく，その過程を見ているスタッフが成長を支援するためのサポート（声かけ・フィードバック等）を行うことができる。

は一つも入ってこなかった。お前らどうでもいいから帰ってくれって（中略）で，その態度を見てたコージ兄に翌日「あれは本当にやばいよ」って。「お前が企画したイベントで，最後までやり切ってくれた仲間のこととか，イベントがどうやって終わったのかとか，一切気になってなかっただろ」って言われて，「人の気持ちが全然分かってないし，そんなやつは全然かっこよくないよ」って言われて。「あ，俺やばいな」と思って，その時。周りは見れてると思っていたし，やればできると思っていたけど，全然分かってなかったなと思って。じゃあそこをなんとかしたい，乗り越えたいなと思って，グッドに関わろうと思ったのかもしれない。

自分自身に興味を持ち始めたYにとって，次に大きなテーマとなったのは，「他者に興味を持つ」ということである。この出来事によって，Yは，人への興味関心の薄さを自覚した。場を盛り上げたり，楽しませたりすることが得意なYは，持ち前の明るさでイベントを盛り上げることができた。しかし，Y自身は中座したイベントの結果にも，一緒に企画してきた仲間や心配して見舞いにきてくれた人に対しても，一切関心を持つことがなかった。筆者は，Yの負けん気の強さを喚起するため，「自分のことしか考えられない人には，人はついてこない」とあえて煽るような言葉で指摘した。このような指摘をグッドでは「ツッコむ」と呼んでいる。実際に起こっている現象や発言に基づいて，課題をそのタイミングでストレートに伝えたことで，Y自身も納得し，事の重大さを理解し，大いに悔しがった。一般的には団体のイベントを企画し，成功させてくれた学生に対して，ネガティブなフィードバックをすることはないだろう。グッドでは，物事を成功させる能力があるかどうかではなく，そこに関わる人々への言動や在り方，つまり，本当の意味で人のことを思いやり，「気持ちの良い人間関係」を築く力を高めることを重要視している。この出来事における悔しさはYの心に火をつけ，人に興味を持つことに意識的に取り組むようになっていった。

3-5-2. 憧れの背中―新たな価値観と理想像の獲得

Yはインターンとしてグッドに関わる中で，スタッフに対してだけでなく，同じインターンの先輩たちへも興味が湧き始めていた。2017年2月（大学2年次），その先輩たちと一緒に活動したいという思いで2度目のスリランカキャンプへの参加を決めた。Yは当時を振り返った作文で，先輩Rについて次のように記載している。

ミーティングで，全参加者がRからかけてもらった言葉について話していた。どうしてこの人の言葉はここまで人の心に届くのだろうかと不思議に思ったし，自分もそんな人になりたいと思った。

体育会系の世界で生きてきたYにとっては，元気で前向きであること，みんなに指示を出しながら先導すること，自分にも他人にも厳しくあることが，目指すべき姿であった。ところがRはそのどれにも当てはまらない。Yとは対照的に穏やかで，人に警戒心を抱かせず，安心感を与えられるような性格である。Rはこのキャンプ中，さりげなく全員に話しかけ，彼らの不安を解消したり，悩みに寄り添ったりしていた。多くの参加者にとってRが印象深い存在として残っていることを目の当たりにしたYは，その姿を「かっこいい」と感じ，新たな理想像の一つを得る経験をした。グッドには，ユースワーカーたるスタッフだけではなく，同じようなプロセスを経て変化した少し先を行く多様な先輩の姿が常にあることが，学生の成長に有効に作用している。また，筆者が，Yの他者との関わり方に

ついてフィードバックをしていた場面が，Yの当時を振り返った作文に記述されている。

「Yは人と話はしてはいるけど，それだけ。昆虫を捕まえて少し眺めては，手放しているみたいな感じだな。」人との関わり方についてこんなふうに言われたのは生まれて初めてだった気がする。うっすら自分でも気がついていたけど，意識的ではなかった部分。自分の基本的なスタンスの例えとしてはとても的確で，「自分という人間の取り扱い説明」として今でも心に刻まれている。

Yは，興味を持って相手の話を聞き，共感しているというわけではなく，データとして情報を収集しているような関わり方をしていた。そして，ある程度のラインまでしか相手に近づかず，それ以上踏み込まないという様子であった。筆者は，他者と対等に関わりあうことで，より親密な関係を築くことがYの成長に繋がると考え，例えを用いて現状を表現し，相手に深く踏み込むという次の課題を提示した。

3-5-3. モンゴルキャンプ―新たな関係構築への試行錯誤と葛藤

3年次，2017年8月のモンゴルキャンプにあたって，Yは，自身と，同級生のインターンとの人間関係について，次のような感情を抱いていることを事前作文に記述している。

さみしい。みんなといるのにさみしい。ひとりで帰る帰り道はもっとさみしい。生まれて初めて湧き上がる感情に戸惑い，自己防衛するかのように目を背けようとした。けど，心のどこかでは目を背けることのできない自分も共存していた。

Yは当時，同級生のインターン同士の関係性と，自身との関係性を比較して，寂しさを感じていた。人と深く関わりたいという意識転換が起こっていながら，うまく関われず空回りをしている状態だった。本音で語り合い，相談し合う周囲に対して，相談することもされることも少なく，孤高の存在として生きてきたYは，なぜ自分は周囲のような信頼関係を築けないのだろうかと悩み始めていた。

そのような状況で参加したモンゴルキャンプでは，周囲との距離の縮め方が大きなテーマとなった。事後作文には次のように述べられている。

ワークが終盤に差し掛かったある日の夜。コージ兄に意外な一言を言われた。「もっとみんなと遊びなさい。もっとみんなを笑わせなさい」みんなとの距離感を縮められていない漠然とした不安感に追われていた僕にとって，この一言は衝撃だった。（中略）「子供が公園で知らない子供と遊ぶような遊び方」今までの僕の遊び方はまさにこの言葉通りだった。その場その場を楽しい空間にしていればいいと思っていたことに気が付いた。その日から目の前の人を意識して，相手と自分がハッピーになれる関係性を追い求めるようになった。（中略）どんな関係性だったら一生付き合っていこうと思えるのかを模索し，とにかく全力で遊ぶようにした。とにかく笑わせようとしたし，明るくいじってもらえるように努力した。（中略）おそらくこれが僕にとって「好きになりたい。また会いたいと思えるようになりたい」という思いで初めてアクションをしかけ始めた瞬間だったと思う。

Yは，初回キャンプに参加した頃から，人と楽しく遊ぶことはできていた。しかし，その遊び方は相手が誰であれ画一的で，表面的に盛り上がるものの，関係は深まっていかない。幼少期，子供たちは公園で誰とでも遊ぶが，その対象は名前を必要としない「ともだち」である。遊んでいた子について尋ねても，その相手の名前すら憶えていない。人は自分に関心を持ってくれる相手に心を開く。自分を知りたいと思ってくれる相手を，もっと知りたいと思うのだ。相対しているのは誰なのか。相手をきちんと見て，その人との関係

を作ること，その重要性に気づいたYの行動は目に見えて変化した。自ら参加者たちに関わりに行き，それぞれをきちんと見て，その相手を笑わせる。そんな丁寧な接し方に安心した参加者たちは，徐々にYに心を許していった。

3-5-4. インターン生との関わり―身近な人との関係性で露見する課題

その後もYにとって，自分と他者との距離感を縮めるということが大きなテーマとなっていった。当時の様子をYは本人記述の作文とインタビューで以下のように語っている。

（筆者宅で，インターン同級生の）Nと（インターン後輩の）Mと飲んだ際に,「2人にとってYとはどんな存在か」という話題になった。自分にとっては，一緒に頑張っていきたいNと，一番可愛がっていたM。2人から言われたのは「すごい人」だった。自分が思っている関係性と，その人が思っている関係性ってこんなに違うんだとびっくりしたし，少し寂しかった。（中略）この時から「出木杉君問題」が顕在化した。（作文）

Y：全部ひとりでやってやるんだっていうスタンスが続いていた。（自分は,）疑問とかあったら自分で聞きに行くし，挑戦する場があったら手を上げるし，自分のここヤダなって思ったら直しにかかる。でもそれだと，なんとなく向こうから，上に見られちゃって，関係性が近づかない，“出木杉君問題”が治らなかった。（中略）自分は自分，人は人ってところが強かった。それは何とかしたいって思った。じゃあ目の前にいる人を他人だと思わずに，その人に対して思っていることを伝えてみようと思った。でもうまくいかないし最初はものすごくむかついた。自分だったら絶対そんなダサいことしない，やるって言ったのになんでやらないんだ，とか。（インタビュー）

大学4年次，Yはともにインターンとして活動していた同級生Nと後輩Mに自分の印象を聞いた際,「すごい人」と一言で表現されたことに大きなショックを受けた。彼らと仲良く一緒に活動できていると思っていたYだったが，周囲からは，なんでも器用にこなし，いつもモチベーションが高く，自分には到底敵わない存在だと認識されており，なかなかその距離感を縮められずにいた。イベント企画や事務所での活動に励む中で，Yは他のインターンとより意義のある時間を過ごしたい，本音を言い合える関係になりたい，と考え，意識的に自分の本音や，実現したいことなどを話すようにしていたが，周囲のインターンから見たYの姿は常に一段上の存在になってしまっており，「Yに自分の気持ちはわからない」「なんでもできるYにだけは言われたくない」と，一向に心理的距離が縮まっていかなかった。その状況に苦しみ，葛藤するYに，筆者は双方のギャップを，ドラえもんの登場人物である出木杉君とのび太に例えて「出木杉君はなんでもできて尊敬されているが，いつもみんなに愛されるのはのび太の方だ」と説明した。「のび太にはとてもなれそうもないが，どうしたらいいだろうか」と問うYに，筆者は「のび太の魅力は何もできないことではない。出木杉君の問題はなんでも完璧にできることではなくて，本気で怒ったり泣いたりしないこと，つまり人間臭さが出てこないことなのだ。人は，リアリティーのある生き様に愛着を覚えるものなのだ。もう少し，泥臭く，人間臭く生きてみてはどうか」とアドバイスした。Yにとっての出木杉君問題は，その後何度も登場するが，その度にYは，その問題について人間臭く悩む姿を周囲に見せられるようになっていった。

3-5-5. 学生最後のスリランカワークキャンプ―弱さを知り，他者への理解を深める

大学卒業を控えた2019年2月，Yは5度目のスリランカキャンプに参加する。直前には，大学の友人の発言にひどく動揺し，落ち込んでいた。事後作文では次のように記述している。

「Yはいい意味でも悪い意味でも変わった。（中略）辛い時も真っ先に頭に浮かぶ顔はお前の顔だし，負けたくないと思う存在でもある。けど，一緒にいるとき，話をするとき。なんでかはわからないけど背筋が伸びて，しっかりしないといけないと思ってしまう。（中略）言ってくれることはいつも正しいんだけど…」そう言ってくれた優しさは素直に嬉しかった。（中略）だけど何かがはじけ飛んだ，そんな感じもした。（中略）すぐ切り替えられると思っていた。だけどなぜかできなかった。

ショックを受けた状態のままでスリランカキャンプに参加したYは，これまで経験したことのない「ずっと悩んで，落ち込んでいる」という状態で過ごしていた。表面的には楽しそうに振る舞っているが，内心，常に自分の言動に疑いが生じ，日頃の高いモチベーションが保てない様子であった。事後作文は次のように続く。

「Y，心閉じてんじゃん」コージ兄に言われてようやく自分がなんでこうなったのかを認識することが出来た。心，閉じてたんだ。全部自分の中で解決しようとするスタンスに逆戻りをしていた。辛いことには蓋をして，なんとなくなかったことにして進もうとする。（中略）少しずつ調子が上がってきて落ち着いてきたころ，これまた初めて，今までの自分が恥ずかしいと思った。みんなも苦しい時，こんな感じだったのかな。調子が悪くなるってこういうことを言うんだろうな。俺，何もわかってなかったな。みんなの気持ちを一つも考えられてなかったのに，それでも突き進もうとしたり，散々物を言ってきたりした自分がとにかく恥ずかしかった。（中略）マイナスな感情を受け入れながら超えることの難しさ。自分の脆さと弱さ。辛い時に自分が陥るパターン。はじめて人が羨ましいと思ったり，自分が恥ずかしいと思ったり。ここにきて改めてたくさんの気持ちや弱さを知ることが出来た。（中略）自分の中で気づいたことをキャンプ終盤に（インターンの同級生の）Kに全部話した時，「やっとYのこと人間だなって思ったよ。けどやっぱり強いな，Yは」と言ってくれた。（中略）コージ兄は「ようやく『のび太』の気持ち，わかるようになったな。まだまだこれからだけど，本当によかったなぁ」と言ってくれた。本当に嬉しかった。これで終わりかと思うと，この２年半のいろんな出来事が蘇ってきて，寂しくなった。

この出来事は，Yが仲間の抱えていた感情を理解し，共感するための契機となった。キャンプ終盤で筆者と話をしたYは，落ち込んだ状態から抜け出すヒントが見つけられず苦しんでいる様子だった。その状況が，何をきっかけに始まっていて，どこにつながっているのか。それが外からはどう見えるのか。これまでのYの在り方を踏まえつつ，様々な言葉やメタファーを用いて根気強く伝えることで，Yはそれが，自分の特徴である「辛い感情に蓋をする」状態であることを認識し，やっと，このままキャンプを終えることはできないという感情が溢れてきた。落ち込んで，「自力で立ち直れない」という状態を初めて経験し，その状況を客観視したYは，そこでようやく，これまで周囲が抱いていた葛藤や苦しさについて理解・共感をすることができた。そして，その苦しみを理解せず，ストレートに真っ当な意見をぶつけ続けていたことを反省した。初回キャンプの際，「悩みはないし，あったとしても，寝て忘れるか，解決策を考えて進む」と胸を張って話していた青年は，初めて自身の弱さを体感し，周囲に救われたことで，多くの人が抱えている「のび太」の気持ちがわかるようになった。そしてY自身も，そんな人間らしいYの姿を目の当たりにした同級生のインターンたちも，ようやく同じ土俵に立てているという感覚を持つことができた。Yはかつての自己完結型のYでは知りえなかったさまざまな感情を，2年以上の

年月をかけ，周囲の仲間やスタッフとの関わりの中で体得し，ついに本当の意味での「理解」に辿り着くことができた。

3-5-6. 学生時代を振り返って

学生時代のグッドでの経験について，Yはインタビュー内で次のように述べている。

Y：もともと自分は一人で生きていきたいって思っていた。（中略）そんな自分でも本当の意味で信頼し合え，気負わずに，腹の底から笑える仲間が作れたっていうのは，すごいことだなって思う。（中略）きっと心のどこかでは苦しかった。誰にも悩みなんて相談しようと思ってないし，弱みを見せたら自分は崩れてしまうと思っていたし，だから自分はずっと強くないといけないと思っていた。

Y：グッドには，踏み込んでくれる人がいた。楽しい話だけじゃなく，いろいろ伝えてくれて，すげー厳しいことも言ってくれた。ずっと見てくれている人からの言葉にはものすごく重みがあったし，納得感もあったし，その分悔しかった。（中略）さすがに前向けないっていうタイミングもあったけど，感づいて話を聞いてくれるのもグッドの人で，気負わずに話せちゃう関わり方をしてくれたから自分はまた前を向いて少しでもかっこいい自分に，より良い自分になっていこうと決めていた。

終わりに

一見すると快活で，なんの問題もなく，明るく元気に生きていた20歳のYは，数々の出会いと経験を通して，自分自身の内面に向き合い，初めて出会うたくさんの感覚や感情と葛藤しながら，他者と共に生きる喜びを手に入れ，今，20代後半に差し掛かっている。学生時代のYに起こった変化は，AというものがBに変わったというような単純な変化ではない。高い山を登るように少しずつ歩みを進め，振り返るたびに広がっていく景色に励まされながら，時に困難にくじけそうになりながらも新しい目標を手にし，またそこに向かって歩みを進める，そんな段階的な変容であった。彼の変化の背景には，空気を読み合う表面的な付き合いや，その場限りで盛り上がる関係ではなく，敬意と信頼をベースにした深い人間関係があり，様々な感情を分かち合った仲間と，客観的なフィードバックを与え続けたスタッフたちがいた。

Yはグッドでの経験を経ずとも難なく大学を卒業し，器用に世の中を渡り歩いていっただろう。むしろその方が，思い悩むことも少なく，楽な道だったのかもしれないとも思う。それでも，今，どんな人とも気持ちよく関わりながら，誰よりも人の為に汗を流し，心から笑うその魅力的な姿は，かつての「一人でストイックに頑張るY」からは想像もつかない。卒業から5年。社会人になってからのYの変化やグッドとの関わりについては，次稿に譲ることとする。

【参考文献】

磯田浩司・仲山友，2022，『ユースワークにおける指導法の研究 ワークキャンプ参加者の意識変容に着目して』，神奈川大学心理・教育研究論集。

磯田浩司・仲山友，2023，『ボランティア・ワークキャンプを通して経験した学生の成長プロセスについて』，神奈川大学心理・教育研究論集。